

医学愛好家を育てるために

大村敏郎

医学の研究には多種多様なテーマがあり、研究方法も色々である。これに取組む人も多く、学問として確立しているといえる。では医史学の教育という面からみたらどうであろうか。医史学教育の現場にいる者は努力しているつもりでも、医学に携っている多くの人々は、現代の忙しい医学・医療にふりまわされていて、自分から踏みこんで医学の歴史の中に飛びこんではいけない。そんなこと知らなくても医療はできるからである。国家試験の問題の中にも取り上げられないかぎり一般の医学生も同じような考えを持ってしまう。

しかし、医学の指導的な立場にある人々の一部ではあるが、医学のあり方を追求して、その中で医学の歴史は非常に大切だから是非学んでおくべきだと強調されている。医学史教育の需要は確かにあるのである。誰かがしなければならぬとすれば、誰がどのような機会にこれを教育の中に持ちこむことができるか。

わが国の現在の医学部や医科大学の中で、教室としての単位を持っているのは、医育機関名簿でみると、順天堂大(教授1)と横浜市大(助教授1)だけである。また講義としての医史学は慶應・慈恵・東邦・弘前大・北大などにあり、他科の教授や客員または非常勤の教員によって維持されており、その他医学序論・医学概論などという名のもとに、医学史関係の情報が提供されている大学はあるが、実態はつかみにくい。

また、基礎・臨床の各講義の中で、初めに1コマ位は歴史を取上げている指導者もあるのだが、人名と事実を並べる

だけで年表をくつっているような密度のうすいものになってしまい、医学史を学んだという実感は学生にはないようである。

さて、この機会に考えたいのは医史学のための医史学だけでなく、医学教育全体における医史学である。私は医史学と医学史という言葉を用いているが、それは研究は医史学でなければならぬが、教育の方は医学史といつてもさしつかえないと考えるからである。

多くの場合入学してすぐの学生に講義することになるので、なるべく解りやすく具体的に、そして聞いていてワクワクするような意欲をかきたてるような講義にしたいものである。

医学がいかに重要で、いかに大変で、いかに面白いということを歴史の中から話題を拾って解説し、医学に対する各人の姿勢を作るとというのが私の目ざしている初期医学教育における医史学である。昨年の日本医学教育学会に「医史学という名の医学概論」というテーマで発表した。この学会は教育に意欲的な人々の集まりであり、その努力を持寄る学会であるから、ここで同意が得られたことは大変心強く、励みになる。私は現在の問題点として①、大学に医史学に対する関心がない。②、カリキュラムにゆとりがない。③、もし以上の二点が満たされたとして、医史学教育の担当者が充分用意されていないといけない。以上の三点を指摘した。

医史学は身近かな親しみやすい話題がちりばめられている。知識のつながり、技術の流れ、人の生き方など医学をダイナミックにとらえることができる。進歩し分化していく医学と統合してみることができる。過去から現在を見すえ、未来の展開を考えることができるなど、初期医学教育に役立つことが多い。

さらに医療関係者の生涯教育でも効果を発揮する。現在各学会や医師会の講演会に歴史を取り上げた演題は大いに歓迎されている。歴史研究にまで立入らなくても、歴史の常識はもつと持っていてほしいし、それは臨床や研究に生かせるはずである。

さらに広めて、医療の世話になる人々への啓蒙教育としての医史学も大切に考えたい。市民大学や教養講座に招かれることがあるが、ここでの反応の大きさに驚くことが多い。このように人類共通の文化として医学に親しんでおいてもらえば、新しい医療の問題に対するコンセンサスも容易に得られるのではないだろうか。

私は外科医の立場から、具体的なものを示す手段としてスライドを多用している。それも読む文字のスライドではなく、眺めて感じる画像が理解を深めるようだ。歴史という時代を縦に動く以外に、地理上の横に動き旅の要素を持たむことで、心豊かな楽しいものにして、医学愛好家を育てたいと考えている。

(慶應義塾大学医史学研究室)